

命ある限り

星、星、星…この世に光り続ける星達…
丸く、暖かく、大切なぬくもりを持つ、星…
大きな星、中くらいの星、そして、小さな星…
どれもが美しく、どれもがこの世に必要な命…

あつ、大きな星が些細な事で、小さな星を必要以上に責め立てている！
中くらいの星は、何もせずにただそれを見ているだけ——
なぜ、なぜ？ なぜ！？
止めもせず、注意もせずに——。

〈この星は存在価値がない〉中くらいの星の声…
〈そいつがいると迷惑なんだ〉再び中くらいの星の声…
〈ここから消えろ！ もう二度と生まれてなんかくるな！！〉大きな星の酷い言葉…
ああつ…小さな星は、悲しみのあまり自らその光を消してしまった！

ポツ ポツ ポツ…涙、涙、天からの涙…
悲しみと苦しみを涙に代えて耐えていた小さな星は、とうとう自ら光を消してしまった…
最後の煌めきは悲しいほど美しく、まるで何かを訴えるかのように——。
それに気付く星はどれほどだったであろうか…。

この小さな星と同じ運命になった人々はどれほどいるのだろうか？
自分を追い詰めて、自らの命の光を消してしまった人々はどれほどなのだろうか？
せつかく命を賭してまで、訴えたにもかかわらず、己の身の安全しか考えない者たちに、
全てを闇に葬られてしまった人々がどれほどいるのであろうか？

なぜ、思いやりの心を持ってないのだ？
なぜ、相手の立場になって考えてやれないのだ？
なぜ学びの場を奪うようなことをするのか？

なぜ、命を賭した訴えを平気で握りつぶせるのだろう…。

遠い昔、一つの小さな星が、自ら光を消した星と同じ運命を辿った。

だが、その星は自らの光を消さなかった。

思いやりの心を持ってないでいる星達の為に光を消すわけにはいかないと考えたのだ。

その星は、今も生きている。

いつの日か大きな星が、己の過ちに気付く事を願いながら――。

その星は生き続ける。

中くらいの星が、愚かな行為を繰り返していると気付く事を願いながら――。

その星は、願い続ける。

いつの日にか、全ての命が、助け合って生きていく事を…

その星は、願い続ける。

優しき星が自ら光を消さないでいてくれる事を――。

その命ある限り――。